具を抱いて初めて水彩寫生を試みたのは炎暑燒くが如き八月下旬でした、松川原の裙、人燒場の煙筒と短き杉の樹立とを望むだ景で、常は容易な色と思つたのが筆を取つて向つて見ると中々現はせず、幾度か洗つて、漸く出來たのが極めて不自然なお耻かしいものでしたが、それでも自分の手になつたものだと思へは何となく愉快に感ぜられました。

△次の寫生には、廣々とした青田の遠く樺色の鐵橋を望む景で、中途村の子供が二三人又五六人集つて來ました、ハ、、お誂ひ向きだと微笑まれましたもの、畫が畫なので氣の毒にと思ひました、其の後此の頃では田舍家、黃色の田野、山間の紅葉等試みて居りますが、其の都度筆や道具に不足を感じて、最初のスケツチブツクが木炭紙となり、此の頃はワツトマンを使用して居る次第です、試みに位置撰定事項を擧げて見ますれば、可成人の來ない單純にして色彩の豐富な面白き場所なんです、自然も此の註文にはちと當惑するでせう。

△寫生を初めてからは無頓着であつた自然の變化が非常に面白く感じます爲めに、時の一刻も實に惜しいやうに思はれます、秋の夕野末に立つて無限なる自然の美彩にあこがるゝ時、あゝ思ふまゝに寫し得たならばと嘆息するのです、「みづゑ」の口繪及び記事が如何に私を喜ばしめませう、野外に出ては精神が淸淨になります、不快感がスツカリ拭ひ去られます。

△私は永く偉大なる自然の懷に抱かれつゝ行きたいと思ひます、あゝ無限の慰藉者よ!!!

## 新年會

見聞子

日本水彩畫會の新年會は一月二十四日に研究所で開かれた、寒いけれども好天氣で、霜解け道をふんで出掛けたのは午後の二時、丁度階上で批評が始まつてゐる處、見渡した處作品はいつもの半分位しかない、有力の赤城サンや夏目サン、新進の鈴木サンの繪が見えない、八木サンは大ぶ振つてる、批評は河合、大下、磯部、藤島諸先生で、叮嚀に一枚々々合評される、これが濟んだのは三時頃、いつもの通りお菓子に蜜柑、これで月次會終り、續いて新年會が始まる、直ぐ餘興で、赤星サンと上村サンのピヤノと琴の合奏、次はピヤノ獨奏、それからは會員の剛の者が吾も〳〵と出席して、琵琶、ハモニカ、假聲、詩吟、手品、大道商人、物眞似、七面相、金色夜叉、落語等があつて、六十の出席者の腮を外させた、中でも素敵に振つてたのは、大道商人、ガマの油、福太夫の假聲、西尾君の落語は本職跣足、駄目太夫の金色夜叉と來ては、一人で千鳥の聲も、浪の音も、艪の漕ぎ方も、宮サンになつたり貫一になつたり、餡パンの月を出したり中々忙しい藝當であつた、上村、松平兩孃の琴、六段の合奏を打止として散會したのは九時頃、それから跡に殘つてカルタをやる連中も何人かあつた樣子、何しろ大へんな新年會で、半日半夜腹を抱へて樂しく過した、いつもの例とあつて御馳走は五もくずしに茶椀むし、御酒がないので少數の上戸は失望したかも知れない。